

第30回平和祈念コンサート 講演会

【中村年子氏】ただいまご紹介にあずかりました、中村年子と申します。

猛暑の中、また、コロナの中を大勢の皆様がお越しくださいまして、誠にありがとうございます。

本日は、学童の集団疎開についてお話しさせていただきます。

1944年、戦争が激しくなり、子供を安全なところへという政府の方針に従い、私のいた小学校でも疎開が始まりました。

田舎のある方、親類縁者のある方は縁故疎開を、その他に学校単位で疎開する学童集団疎開という制度があり、私たち5、6年生は富山県水橋町の照蓮寺に行くことが決まりました。

夕刻、家族の見送りで校庭に集まり、貸し切りの夜行専用列車で、一路、疎開先へ向かいました。

翌朝、白々と明けたすぐ外には海が見え、まるで波の上を走っているようでした。今で言うなら、まるで銀河鉄道のようなようでした。

海上に突き出た大きな岩や小さな岩が目飛び込んできました。親知らず子知らずのいわれのある難所だと伺いました。

やがて目的の水橋駅に着くと、町の方々が大勢で迎えてくださり、お年を召された方々の中には、まだ子供の私たちを見て涙を流されていた方もいらっしゃいました。

疎開の生徒たちは、三つの班に分けられ、私たち1班は大きなお寺の照蓮寺に落ち着きました。

着いてから1週間くらいは無我夢中でしたが、親元を離れて日ならずして寂し

さが募り、夜になって生徒の一人がすすり泣きを始めると、堰を切ったように一斉に皆が泣き出して、涙の大合唱となり、道行く人の耳を打ったそうです。

それでは、お寺での一日の始まりについてお話ししましょう。

東京から引率して来てくださった先生は、音楽が堪能でラッパがとてもお上手でした。それで、朝は起床ラッパ「トテチテタ、トテチテタ」の音とともに飛び起き、布団を畳み、きちんと積み上げて、その前に整列・点呼を取って、まるで軍隊のようでした。洗顔、掃除などをしてお御堂に集まり、十二礼拝という読経と朝礼が終わると、やっと朝食の時間になりました。

その後、庭に整列して登校するのですが、「欲しがりません、勝つまでは」という標語を守り、防空頭巾、救急袋、教科書を背負い、もんぺ姿です。皆さん、もんぺ姿はご存じですか。今はズボン、スラックス、パンツと呼んでおりますが、足首のところにゴムをして縮めたものです。その姿で、私は登校の前に、川隣にある神社に毎朝お参りをしてから学校に通っていました。

5年生は三つのクラス、松組、竹組、梅組があり、疎開の生徒は5、6人ずつ編入されました。

それでは、富山で初めて覚えた言葉のお話をしましょう。

「東京のオッサンはダラや」と「ケイガはドイガデスカ」という言葉です。一つ目の言葉の「オッサン」という響きに対して、私たちはオッサンではないと何度も何度も言い返しました。二つ目の言葉は、先生が黒板を指しながらおっしゃったのですが、何が何だかさっぱり解からず、東京の生徒たちは皆、ぽかんとした顔をしていました。

帰宅後、寮母さんに「ダラ」とは何か質問したところ、「そんな言葉は覚えんでいいイイチャ」と言われました。

数日後、先生の言葉は、「これは何ですか」という質問とのこと、「東京のオ

ッサン」と聞こえていたのは「東京の産」、「産」は「生まれ」、「ダラ」は「馬鹿」だということが分かり、驚きました。

また、富山の方言はイントネーションが尻上がりになるものがあり、「起立・礼・着席」のかけ声が全然違って、すなわち、「キリーツ」「レイー」「チャクセーキ」のようになります。何となく違和感があって戸惑ってしまいました。

さて、学校には、当時、配属将校なる人が、1メートルもあるかと思われるような長い軍刀を下げ、校長先生より強い人のように思いました。

当時は、竹槍、なぎなたの教練がしばらく続きましたが、やがて運動場は全て畑となり、サツマイモなどが植えられました。何もかも初めての経験でした。

畑まで、肥やしの入った容器を天秤棒で担いで運ぶのですが、慣れない都会の子は腰が定まらず、容器が揺れて中身が飛び散ってしまうため、「もう、やらなくてもええッチャ」と言われて、その役目から外され、申し訳なく思うと同時に、内心ほっとしたのを覚えています。

サツマイモを植えているとき、間から蛇がによろによろと出てきたときは、もうびっくりして、「きゃー」と言って飛び上がってしまいました。

季節が変わり夏になって、私たちは東の浜で面会ごっこをしました。本当の親との面会は年に一、二回あり、その時のお土産は皆で分け合いました。

面会ごっこの方は、海に近い東浜は石浜でしたので、転がっている石の大きさを、おにぎり、キャラメル、お煎餅などに見立てて遊びました。

また、秋の遠足は、立山の麓までの文字どおり歩く遠足でした。途中で疲れて帰った生徒も多い中で、疎開の生徒は最後まで頑張って歩きました。山を眺めながらの昼食はとても楽しく、良い思い出となりました。

やがて季節は冬となり、あの年は36年ぶりの大雪に見舞われた年だったそうで、お寺の一室も雪の重みで屋根がぺったんこに潰れて使えなくなってしまいました。

当時の暖房といえば、三十畳ぐらいの部屋に火鉢が一つしかなく、今では考えられませんよね。大体は1年上の6年生がその周りにいましたので、5年生は、たくさん重ね着をして運動するようにしていました。

玄関から地上に出るには、氷の階段を作って、地上に積もった雪の表面まで行きました。

私が知っている東京のつらは、小指ぐらいの太さで15センチほどの長さでしたが、富山のつらは直径10センチもあって、ひさしから地面まで続く、まるで氷柱のようでした。

ある朝、履物が全部がちがちに凍りついていて、他に履ける物が何もなくなったので、お御堂の欄干から学校まで素足で走って行きました。下駄箱の前のすのこにたどり着いたときは指がたらこのように真っ赤に腫れ上がり、感覚もなく震えていました。ただただ涙が溢れてきて、がたがた震えていました。

学校の校舎の二階の窓から私たちを見ていた同級生が駆け下りてきて、「このままにしていたら凍傷になるがヤネ」と言って、一生懸命、私たちの足をさすってくれました。この時ほど厚い友情を感じたことはありません。忘れることのできない宝物となって心に深くしまっています。

それまでは、「東京の人が来てから富山の米がなくなる」と言われ、とても悲しかったのですが、このこと以来、友情に火がつき、仲良くなりました。

やがて春になり、3月、卒業のために6年生が東京に帰ってから、入れ替わりに4年生以下の子が仲間になりました。

最上級生の6年生になった私たちは、寮母さんのお手伝い、川での洗濯など、できることは何でもしました。また、学校ではほとんど授業がなく、運動場の作業でした。

へとへとに疲れて帰ると、1年生が玄関で待っていてくれて、「お帰りなさい

い」と声をかけてくれました。その一言が、涙が出るほど嬉しく、幼い1年生をととても愛おしく思いました。

それでは、富山市の爆撃についてお話ししましょう。

1945年の夏、蚊帳の中にいた私は、夜中の爆音で飛び起きました。手すりにつかまって富山市の方を見ると、火柱が高く高く、もくもくと上がり、その火柱の中から、一機、また一機とB29が飛び立っていったのが今でも目に焼き着いています。

翌朝、疲れ切った様子の煤だらけの人たちが、水橋にも大勢やってきました。私たちは、その人たちに、おにぎりをたくさん、たくさん作りました。まだ小さい手でしたけれど、たくさん作りました。子供心に大変なことが起こっていることを肌で感じ、恐怖を覚えました。

そして、8月15日に玉音放送があり、10月頃、長い疎開生活が終わり、約1年半暮らした富山を後にし、東京に戻りました。

東京は焼け野原で、バラックがちらほら建っていました。父の作ったお風呂、といっても、コの字型においた大きなブロックの上に大きなドラム缶を乗せただけのものでしたが、詩的に言うならば、満天の星空を満喫できるお風呂につかり汗を流しました。体重を均等にかけて浮き蓋を上手に沈めないと足を火傷してしまうので、慎重に、慎重に、バランスよく入りました。

母は、富山から一緒についてきてしまったノミ、シラミの退治に追われていました。肌着に着いたシラミの卵や毛糸の網目に隠れたそれらを、熱湯で根気よく退治してくれました。

このようにして、1年半にわたる私の学童集団生活が終わりました。

まだまだお話しし足りないことはたくさんありますが、世界中の人が相手を思いやり、仲良く暮らせるようになることを、切に、切に、祈っております。

一日も早くウクライナの戦いが終わりますように。願いはいっぱいでございます。

本日は、拙いお話を長い間お聞きくださり、誠にありがとうございました。